



✿ 自然と歴史あふれる川に近づけるまち ✿

平成18年3月1日に旧三好町と旧三加茂町が合併して誕生した東みよし町。徳島県の西北部に位置し、北には、阿讃山脈、南には、急峻な四国山地を有し、町の中央部には、吉野川が西から東に流れている町だ。

四国のほぼ真ん中に位置し、徳島自動車道吉野川ハイウェイオアシスには、ETC専用レーンが設置され、四国の県庁所在地すべてに1時間半以内で到着することのできる大変交通の便がいい場所でもある。吉野川ハイウェイオアシスやぶぶるパークみかもでは、吉野川の水に直接触れることもでき、国の特別天然記念物「加茂の大クス」は、1000年以上の間、住民たちを見守っている。

このような豊かな自然あふれ、四国の高速交通の中心となっている東みよし町をたずねた。



写真上：上空から眺めた美濃田の淵と吉野川ハイウェイオアシス周辺写真
写真下：吉野川ハイウェイオアシス 写真提供：東みよし町

吉野川とふれあえる唯一の サービスエリア

吉野川ハイウェイオアシスをたずねて



オアシス株式会社 代表取締役
社長藤丸公志さん

「吉野川ハイウェイオアシスは全国でも数少ない、川と直接ふれあえるサービスエリアです」と語る藤丸社長。

目の前には雄大な吉野川と県の名勝・天然記念物に指定されている「美濃田の淵」がある。長さ2キロメートル、幅100メートルにわたる深い淵。「獅子岩」「鯉釣岩」「与作岩」「千畳敷」「雄釜」「雌釜」など、それぞれの形から名づけられた大きな岩の数々を眺めることができる。東西に流れる吉野川は、朝日も夕日も眺めることができ

る川。美しい夕日も
ハイウェイオアシス
から見るができる。

防災面でも配慮がされている施設だ。100年に一度訪れると言われていた洪水の高さよりも高い位置にあり、自家発電装置も備え、自動車道で災害や、事故が発生した場合の避難場所にも指定されている。



景勝・美濃田の淵 四季折々に美しい表情が見られる。
写真左は桜の頃。右は4月下旬から5月にかけての岩
つつじ。写真右の提供：東みよし町

2000年3月にオープンしてから、毎年90万人～100万人が利用している。徳島からだけでなく、四国各地からも立ち寄りやすい所に位置している。徳島自動車道を利用するだけでなく、一般道路からも利用できることから、地元住民も数多く訪れている。



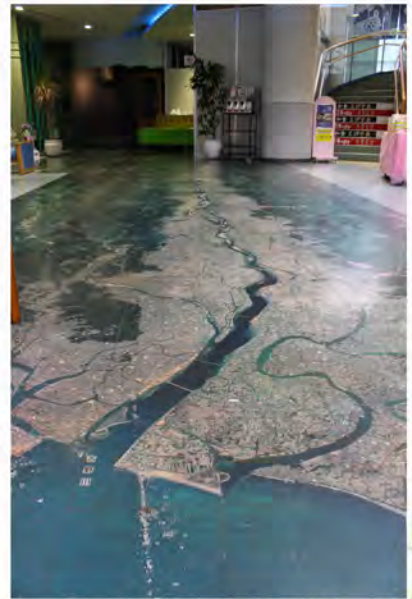
物産センター

吉野川ハイウェイオアシスの中の施設全体の名前が「吉野川ふれあい館」。1階は、四国内の道路・観光情報、地域の情報等を知ることができる「観光情報ステーション」、約2500アイテムの四国各地の名産・特産品を取り揃えた「物産センター」、「農産物直売所」地元のそばや手打ちうどんが食べられる「みのだ亭」がある。2階は吉野川を眺めることができる展望デッキや、多目的ホール、フードコートなど、ゆっくりと時間を過ごすことができる。昨年の秋に改修された風呂施設「美濃田の湯」は、11種類のお風呂があり、ゆったりと流れる吉野川を眺めながらの露天風呂も人気だ。

イベント広場は、徳島県西部では唯一となる、阿波おどりが定期的に無料で見られる施設としても知られている。（毎年4月から10月の日曜日に開催）これからは、さらに滞在型でゆっくりとした時間をすごしてもらおうと、今年の7月上旬には今まであったキャンプ場の他に、ホテルが開業する。14部屋あり、1部屋につき1人から4人程度が宿泊できる。サービスエリアに車を停めたまま、一般道に下りずに宿泊ができる全国的にも珍しい施設となる。「これからも地域とともに、吉野川ともふれあえる開かれたサービスエリアとして、多くの人に何度も訪れてもらえるような施設にしたい」と藤丸社長。実際にお客様からも「吉野川で魚が飛び跳ねているのが見えました」と話しかけられることもあるそうだ。訪れるたびに違う表情が見られる吉野川。吉野川ハイウェイオアシスの今後の展開も楽しみだ。

吉野川ハイウェイオアシスの中の施設全体の名前が「吉野川ふれあい館」。

1階は、四国内の道路・観光情報、地域の情報等を知ることができる「観光情報ステーション」、



吉野川ふれあい館エントランスを入っていくとすぐに吉野川河口からの航空写真があり、今、自分がいる場所や、吉野川の流れがよく分かる。



阿波おどり定期公演。町内外を問わず多くの人が訪れている。

写真提供：吉野川オアシス株式会社



アクセスマップ

吉野川ハイウェイオアシス

〒771-2502 徳島県三好郡東みよし町足代1650

TEL:0883-79-5858 FAX:0883-79-5859

施設により開館時間が異なるのでHP等でご確認ください。



備える
水防

まもなくやってくる出水期に備えて

東みよし町 三庄東部自主防災会 会長 松浦 明さん



出水期には、いつも早明浦ダムの放流量を気にかけているという松浦さん。防災会の方たちとは、お互いの健康を気にかけて、顔の見える連携をしているという。

「私は、50年前に東みよし町にきたんですが、よく洪水に悩まされました。一面が海ようになり、二階へ上がる階段ぎりぎりまで水がくることもたびたびで、怖かったですね」と語る松浦さん。現在は、山口谷堤防ができ、ここ数年安心できる生活が続いているという。

東みよし町では、南海トラフ巨大地震や自然災害などに備え、自治会単位で自主防災組織が設立されており、現在、87の自主防災組織が活動している。松浦さんは、その中の三庄東部自主防災会の会長をつとめられている。

おもな活動は、1年に一度の防災訓練だ。炊き出し、ロープワーク、AEDや担架の使い方、消火訓練など多岐にわたる。「ロープワークでは、洪水の時、流されている人には、こんなロープのくくり方をとか、ペットボトルを浮き輪代わりにする方法を教えてくださいました。いざという時役に立ちます」と松浦さん。日頃からの地道な訓練が

災害時、迅速な行動につながる。

東みよし町でも高齢者の独居世帯が増えてきている。時代とともに人と人のつながり、地域の連携が希薄になりつつある現代。しかし、災害時に力を発揮するのが、人と人のつながりだ。三庄東部自主防災会でも、役員会が中心となり、地域の安全マップを作っている。このマップには、家族構成のほか、高齢者、要介護者の有無も書き込む。日頃から、自治会内で、「元気にしようか」の声かけも忘れない。

まもなくやってくる出水期。松浦さんは、とにかく川や用水などに近づかないことという。また、道路が浸水し、通行止めの看板をおいても、浸水している中に入ってい



く車もあるそうだ。危険な行動は絶対にしないということを我々も心に刻みたい。

国土交通省防災エキスパートのロープワーク講習の様子。写真提供：三庄東部自主防災会。

吉野川スケッチ
in ぶるパークみかも



吉野川の水にさわれるよ!



桑の実、発見。昔は子どもたちのおやつだったんだよ。



自然のなか、広々としたサッカー場は気持ちいい。

吉野川流域 未来へ残すこの逸品



みかも桐下駄

汗を吸い取る吸湿性があり、軽くて、涼やか。きれいで長もち。これが桐下駄の特徴だ。可愛い鼻緒を眺めていると、浴衣を着て、出かけたくなった。徳島県でただ1軒残る桐下駄製造所。それが吉野川流域の東みよし町加茂に残っている。お話を伺った斉藤雄二さん。「最盛期は、40～50軒の下駄製造所があったんですよ」と教えてくれた。戦前、農閑期の収入源として、京都から職人を呼び技術を習得したのがはじまりだそうだ。

斉藤さんは、年間5万足から7万足の桐下駄を3名の職人さんとともに作る。鼻緒を付ける作業は内職の方に依頼している。かつては、生活必需品だった下駄。ライフスタイルの変化とともにファッション小物へと用途は変化しつつある。京都や東京など目の肥えた多くの取引先からは、ディティールや鼻緒のデザインに至るまで、細かい注文があり何度もやりとりを重ねる。

斉藤さん自身も多くのメーカーさんとの出会い、「ああ、こんな感覚って大事だな」「こんなものが見かたもあるのか」と気づきや発



吉野川でよく遊びましたよ。とおっしゃってくださった斉藤雄二さん。以前は、国産桐を使っていたが、国産桐は、なかなか入手できない現状から1割程度使用している。大量の注文に答えるため、厳選された中国産の桐材を使っているそうだ。



種類によって、8種類から10種類の工程がある。

見も多いという。その要望に応えていくことで、また自分が磨かれていくそうだ。ものづくりをしているものとして、下駄作りに決して手を抜かない、取引先、消費者のみなさんの要望に丁寧に応えていくことが一番大切なことと考え、日々仕事に向かい合う。また、毎年斉藤桐材工業有限会社のオリジナルデザインを作る。残っていくもの、残っていかないものがある。それでもそれを恐れず、新しい時代にあった商品を作りだしていく。

これからやってみたいことは?とお伺いすると、「下駄は、夏のものというイメージですが、秋から冬にはく下駄を作りたいですね。素足ではなく、足袋との組み合わせにより趣も変わってくると思います。かつて下駄屋は、正月前が一番忙しかったですよ。みんな下駄を履いて神社にお参りに行っていましたからね」。

斉藤さんのお話を聞いていると自分もワクワクしてくるから、不思議だ。常に挑戦を続ける斉藤さん。その思いがある限りこの地で桐下駄作りは続いていく。